

ごあいさつ

ごあいさつ

本展は、高鍋藩二代藩主・秋月種春に招かれて1667（寛文7）年に高鍋に移って以来、世襲で高鍋藩の絵師を務めた安田義成（初代李仲）をはじめとした代々の絵師の作品と、廃藩後も安田家が大切に保管し続けてきた高鍋藩ゆかりの品々を紹介するものです。

すぐれた作品を手掛け、比較的多くの作品が現存する安田守世（八代李仲）や、その孫にあたる歌人で歴史学者の安田尚義、そして現当主で書籍『モスグリーンの青春』の著者である安田郁子など、それぞれが宮崎の文化醸成に多いに貢献してきました。

今回出品された作品の一部は、現在宮崎県立美術館の寄託作品となっており、久しぶりの里帰りとなります。高鍋の地で、美術の幕開けを飾った時代に思いを馳せ、いまだ色褪せぬ貴重な作品群の魅力を存分にお楽しみください。

本展の開催にあたり、安田家様、宮崎県立美術館様、浄土真宗本願寺派称専寺様、磯米様、岡島直方様、宮崎ケーブルテレビ様、宮崎この人企画様など、多くの方々にご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和4年5月28日

高鍋町美術館

謝辞 凡例

本展覧会に多大なるご協力をいただきました安田郁子様が、2022年12月16日にご逝去されました。ここに謹んでお悔やみを申し上げますとともに、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

謝辞

本展覧会を開催するにあたり、貴重な作品を貸与くださいました安田郁子様、安田進様をはじめご家族の皆さまと、作品調査・文献調査等に際しご協力、ご助言いただきました皆様に深く感謝の意を表します。また、お名前は差し控えさせていただきますが、本展覧会の実現のためにご尽力賜りました方々に、この場を借りて心からお礼申し上げます。

凡例

- ・本誌は「高鍋藩御用絵師 安田李仲と安田家愛蔵品展」(2022年5月28日から6月26日 高鍋町美術館)の開催に際し出品された作品について収録している。
- ・図版および解説部分での作品情報については、作品番号(順路順)、作品名、作者名、所蔵先の順に表記している。
- ・図版および解説部分の図版については、展示順に掲載した。なお、図版が並列している場合は、左→右の順に配置している。
- ・図版および解説部分における主要参考文献の凡例については、別途主要参考文献の部分に記載している。
- ・トークイベントについては、登壇者である安田進氏が、発言をもとに自身でまとめたものを、原文ママに記載している。
- ・トークイベントについては、トークイベント終了後に安田進氏自身が補足のため加筆した部分を斜体で表記している。

目次

ごあいさつ	p.1
謝辞	p.2
凡例	
目次	p.3
図版および解説	p.4
人物略歴	p.29
トークイベント	p.32
3D プリンタによる鑑賞キット	p.44
展示風景	p.46
作品リスト	p.52
展覧会概要	p.54
写真提供	p.55

高鍋藩と安田家

安田家が高鍋藩に仕えるようになったのは、17世紀後半のことです。絵師であり僧でもあった安田義成（初代安田李仲）が二代藩主・秋月種春に招かれて以来、安田家は代々世襲で高鍋藩の御用絵師を務めました。義成の生年は不明ながら、1667（寛文7）年には屋敷と知行（主君が家臣に与えた所領のこと）37石が与えられたとの記録が残っています。また義成はもともと秋月家の家臣であったものが絵を学び、絵師として仕えた可能性もあると言われています。その後も、安田義方（五代安田李仲）が病に伏せた六代藩主・秋月種美の看病につとめたり、八代藩主・秋月種徳の時代には安田家の画室へ一年に二度訪問した記録などが残っています。絵師として最後になる安田守世（八代安田李仲）は1862（文久2）年に安田家の系図を整理しており、絵師本来の仕事である絵画の制作、壁や天井などの装飾、絵図の作成などの他に、砲術の免許を得たり高鍋学校の幹事を務めていたことも分かっています。なお高鍋藩では、1851（嘉永4）年に江戸・京阪地方への藩士の遊学を制度化しており、医学生や漢学生とともに「画学生」という枠が設けられていました。



1 刀掛け 六代藩主・秋月種美所用 安田家蔵

六代藩主・秋月種美は1787（天明7）年容体が悪くなった。長男・秋月種茂は高鍋への帰郷を中止して看護につとめた。八月には次男・上杉治憲も江戸に出て、兄と共に看護に手を尽くしたという記録が残っている。七か月にわたって種茂の側にあって看護につとめた安田義門（五代李仲）はその際遺品の刀掛けを与えられた。安田家ではそれを代々大切に保管している。

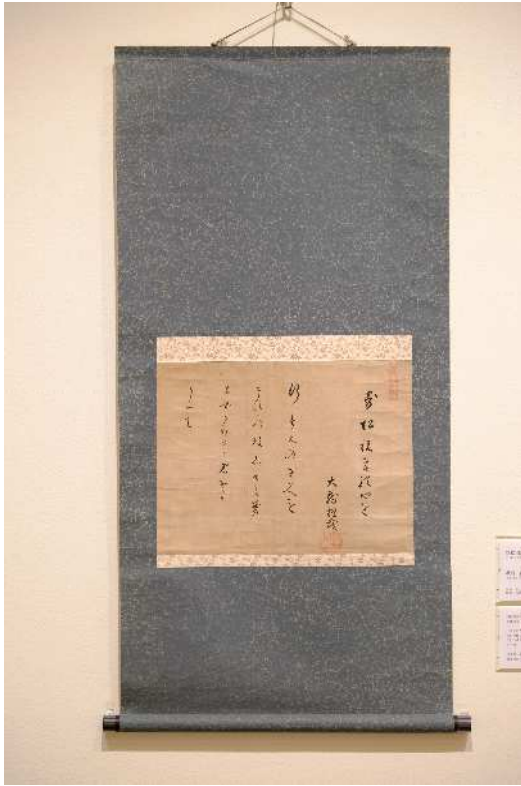
2 写真「琴弾の松の碑」（高鍋町/蚊口浦） 源重之

蚊口浦に、名勝・琴弾の松の標柱と歌碑が並んでいる。松は早くに枯死し、現在南方の隅にあるものはその後に植えられたものだが、歌碑は当時のままありし日をしのんでいる。歌碑は安田義方（五代李仲）らが1781（天明元）年に建て、源重之の詠と伝える和歌が刻んである。裏には渋井孝徳（佐倉藩士で儒学者・上杉鷹山の師）が選んだ文が漢文でが刻まれ、側

図版および解説

面には建碑の年月と、建碑者である安田義方・綾部長英・松岡博章3名の氏名が刻まれている。

しら浪の よりくる糸を をにすげて 風にしらぶる ことひきの松



3 寄松和歌 七代藩主・秋月種茂（鶴山） 高鍋町歴史総合資料館蔵

寄松祝奉る心を

大蔵種茂

行すえのさかへを

まつの枝しけみ幾

千世かけて君そか

そへむ

（行末の 栄を松の 枝茂み 幾千世かけて 君ぞ数えむ）

4 明月来相照 七代藩主・秋月種茂（鶴山） 安田家蔵

この作品は高鍋町歴史総合資料館によってレプリカが作成され展示されている。実物は安田家にて保管されているため、今回併せての公開に至った。

名月来たりて相照らす

漢詩「竹里館」（王維）より

（ただ）明るく輝く月（だけ）が（私の心を知って親しみかけるように）私を照らしてくれている。

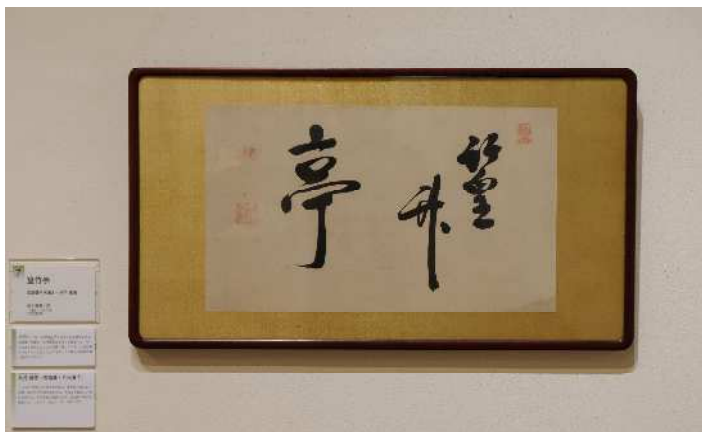


5 涅槃之像 安田甫行（四代利忠） 浄土真宗本願寺派称専寺蔵

1976（昭和 51）年に浄土真宗本願寺派称専寺（高鍋町・以下称専寺）で見つかったものである。釈迦が入滅する姿を描いた涅槃の図で、大型の極彩色で、経典に忠実に描かれている。称専寺は、釈迦の教えを棄却した廃仏毀釈から奇跡的に逃れられたことで、現在まで大切に保管されてきた。なお、安田義成（初代李仲）が手掛けた同様の構図の作品「仏涅槃尊像」（1691 年/元禄 4 年）は、真宗大谷派願蔵寺（都城市）が所蔵している。

6 聖徳太子像 浄土真宗本願寺派称専寺蔵

聖徳太子（574 年/敏達天皇 3 年～622 年・推古天皇 30 年）は没後、救世観音の化身などと慕われ、その生涯や伝説は絵画や彫刻で数多く表現されている。この作品では、聖徳太子が 16 歳のときに、用明天皇（聖徳太子の父）の病が癒えるようにと柄香炉（えごうろ）で香をたき祈る姿が描かれている。



7 簀竹亭 八代藩主・秋月種徳 安田家蔵

「簀竹亭」とは、安田邸にかつて存在した画室である。高鍋藩八代藩主・秋月種徳は当時この画室へは1年に2回ほど訪問したことが記録に残っている。以前は通りからすぐに入ることができるように敷地の南東の隅に建てられていた。



8 鶴百態 安田守世（八代李仲） 安田家蔵



9 七福神図 安田守世（八代李仲） 安田家蔵

図版および解説



10 筆入れ箱・箔箱・絵皿・金箔 代々安田家絵師 安田家蔵



11 自画像 安田義成（初代李仲） 安田郁子蔵（宮崎県立美術館寄託）



12 白鷺の図 安田義門（五代李仲） 安田郁子蔵（宮崎県立美術館寄託）



13 中国美人図 安田守義（七代李仙）



安田郁子蔵（宮崎県立美術館寄託）

14 中国美人図 安田守義（七代李仙）

安田郁子蔵（宮崎県立美術館寄託）



15 折衷和漢古図 安田守世（八代李仲）

安田郁子蔵（宮崎県立美術館寄託）

図版および解説

日本画と中国画の折衷した作風で、琴棋書画（きんきしょが）を主題とした作品である。琴棋書画とは、琴・碁・書・画を指し、古くから中国にて四芸と称され、人格者の身に着けるべきものとされていた。画中の上から順に、画を眺め、琴を弾き、書を記し、囲碁を打つ様子が見てとれる。



16 壽老人 安田守世（八代李仲）安田郁子蔵（宮崎県立美術館寄託）

17 七福神図 安田守世（八代李仲） 安田郁子蔵（宮崎県立美術館寄託）



18 高鍋城瓦 安田家蔵



19 ひな人形 狩野守玉（探龍） 安田家蔵

安田守世（八代李仲）は 1844（弘化元）年に 15 歳で江戸に出て、1849（嘉永 2）年までの 5 年間狩野探龍に師事していることから、この作品は狩野探龍から守世へ送られたものであることが想像できる。



20 ふよう 安田守世（八代李仲） 安田家蔵



21 写真「双竜の図」（木城町/比木神社） 安田守世（八代李仲） 比木神社蔵

比木神社は西暦 200 年代に五社大明神をまつたのが始まりと伝えられている。江戸時代には高鍋藩歴代藩主が深く崇め、度々参拝したという。この神社の拝殿から本殿にわたる渡殿の天井に、二つの竜が玉を争う絵が描かれている。その昔この戸渡に泊まった人が夜中にさわさわという音に目覚めると、天井の竜が絵から抜け出して蛇ヶ淵（じゃがふち）に水を飲みに行ったという話が残っている。この竜は、はじめ初代李仲が手掛け、1792（寛政 4）年に大風のため損傷したものを五代義方が復元したが、1877（明治 10）年の火災で焼失した。現存の絵は再建後に安田守世（八代李仲）が復元したものである。

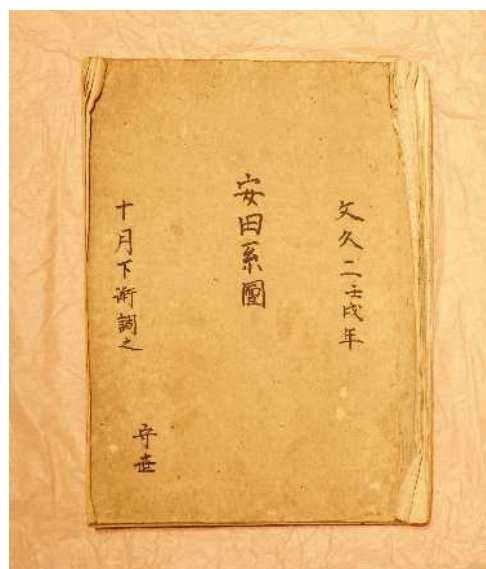


22 湿式ガラス版/写真 安田守世（八代李仲）と安田信義 安田家蔵

湿板写真とは、ガラス板に薬品を塗り、それが乾くまでに撮影をする撮影技法である。よく知られている坂本龍馬が台に寄りかかった写真も、同じ手法で撮られたものである。明治2年撮影で、子息の松之介（のちの安田信義）は15歳、英学勉強中の時期であったとの記録が残っている。



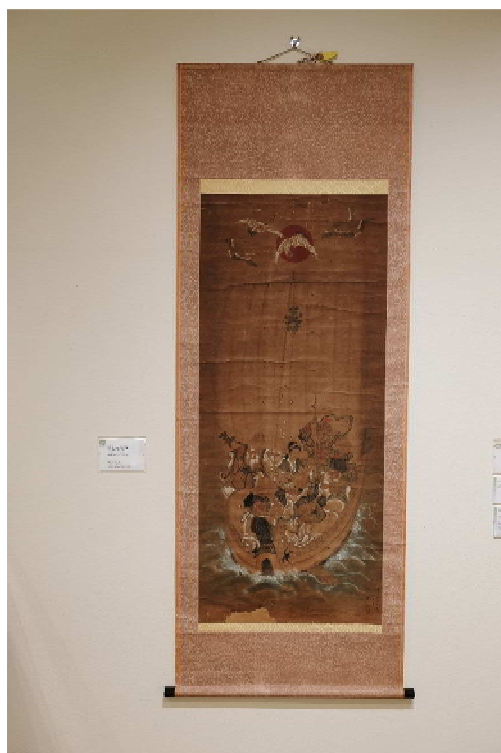
23 雑書 安田守世（八代李仲） 安田家蔵



24 安田家系図 安田守世（八代李仲） 安田家蔵



25 寄書 狩野守玉（探龍）ほか 安田家蔵



26 初日七福神 安田守世（八代李仲） 高鍋町歴史総合資料館蔵



27 豊頬大耳 安田守世（八代李仲）・秋月種樹 安田家蔵



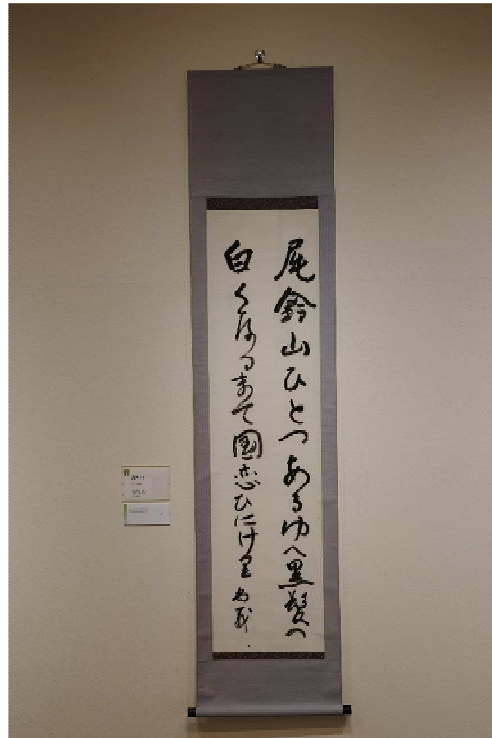
28 菊 太田水穂 安田家蔵



29 あたの山 安田尚義 安田家蔵



30 古処山に 安田尚義 安田家蔵



31 尾鈴山 安田尚義 安田家蔵

図版および解説



32 山茶花 安田尚義 安田家蔵



33 明日 安田尚義 安田家蔵



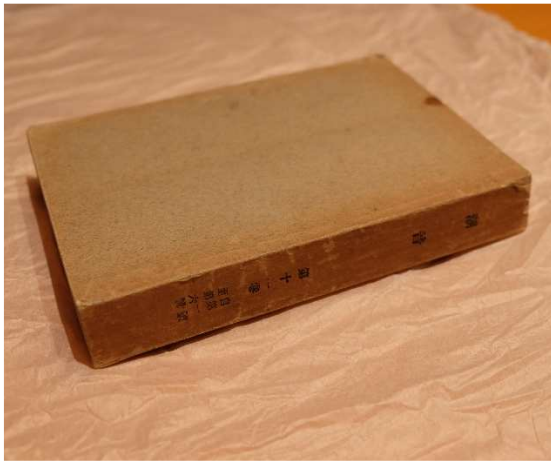
34 花嫁 安田尚義 安田家蔵



35 安田守世（八代李仲）像 安田尚義 安田家蔵



36 名誉町民章・旭日章・瑞宝章メダル 安田家蔵



37 潮音 第11巻 安田家蔵

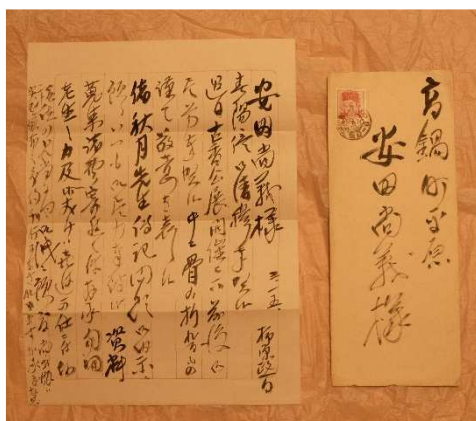


38 山茶花 第5巻 安田家蔵

若山牧水と安田尚義

安田尚義は、安田義成（初代安田李仲）から数えて 10 代目にあたります。廃藩とともに帰農した安田信義（九代）の子で、地理歴史の教師を務めながら、歌誌『潮音』に発表するほか、自身も歌誌『山茶花』を主宰するなど歌人として短歌の発表を意欲的行いました。高鍋町へ帰住後は、ラジオや新聞の歌壇選者のほか、『高鍋藩史話』『上杉鷹山』『秋月種茂と秋月種樹』など郷土史研究にも力を入れ、1971（昭和 46）年には高鍋町史友会を設立しています。そんな尚義が歌への機縁を作ってくれた 3 人として名前を挙げているのが、祖父・安田守世（八代安田李仲）、歌人・落合直文、歌人・若山牧水です。特に牧水は、同時期に早稲田大学へ入り同郷の関係から交流を深めたと言われ、尚義は牧水が 1910（明治 43）年に創刊した歌誌『創作』にも多くの作品を発表しています。尚義は、『創作』には「上園素人」の筆名で発表していました。この二人には、同じ尾鈴山を詠んだ名歌があります。

ふるさとの 尾鈴の山のかなしさよ 秋もかすみの たなびきてをり（若山牧水）
 尾鈴山 ひとつあるゆゑ 黒髪の白くなるまで 國恋ひにけり（安田尚義）



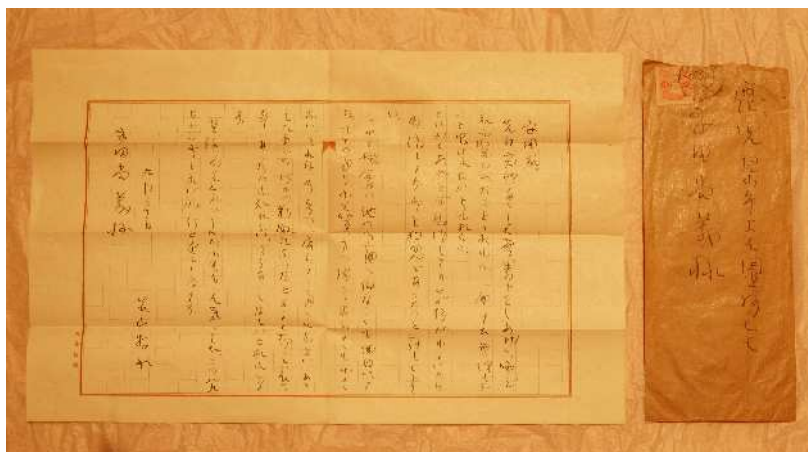
39 柿原政一郎が安田尚義に宛てた書簡 安田家蔵



40 集合写真（柿原政一郎と安田尚義） 安田家蔵



41 柳田國男が安田尚義に宛てた書簡 安田家蔵



42 若山牧水が安田尚義に宛てた書簡（原稿1点・絵葉書5点） 安田家蔵
協力：宮崎県立図書館 若山牧水記念文学館

(上の段)

(初公開)

安田君 先日、突然ああした葉書をさしあげて嘸(さ)ぞ君も驚かれたこととおもふ。一面また無理もないと思はれたかともおもう。とにかくあれをば取消します。少粗忽であったのを許して下さい。これを機会に他の方面へ向はるゝも面白い また、もとの通り小生等の方へ帰つて来らるゝもわるくない。それは今考へて居らるゝ通りになさい。あゝした事でも何かの刺激になったとすると却って君の葉であったかもしれない、さうあつてほしいとおもひます。其後、お元気でしたか、小生も元気でした。この八、九日から少し永い旅行を企ててゐます 九月三十日 若山牧水 安田尚義様

1920(大正9)年の絵葉書から二か月経たぬうちに、また牧水から書状が届いている。創作社友だった安田は、1922(大正11)年から太田水穂の潮音社に加入している。「もとの通り小生等の方へ帰つて」とあるのは、結社移籍を指すと思われる。「八、九日から少し永い旅行」とは、10月14日から末まで長野群馬を旅したことを指す。旅の様子は「みなかみ紀行」としてまとめられた。

(下の段・右から1番目)

(様式) 絵葉書 ススキと蜻蛉

(消印) 不鮮明

(宛名) 鹿兒島市上之園町 安田尚義様

(差出) 八月四日 不忍池畔にて

(翻刻)

カミソノソジン

カソジャナイク

ヤスダナントカヨシ

トシテオケヤ

ソレく、 牧水

国へ御かへりですか

御変りなりませんか

春翠

早稲田大学に入学し、同郷の交流を続けた若山牧水と安田尚義は、宮崎県人会を通じて交流を続けた。1916(大正5)年には牧水の『創作』に投稿し始め、ペンネームは「上園素人(かみそのそじん)」とした。尚義は創作社に7年間籍を置いたが、牧水の詩人的性格に辛抱しきれなくなった尚義はついに去り、1922(大正11)年に太田水穂の主宰する潮音社に加入した。これらの書簡・葉書は、尚義が創作社を離れる2年前のことである。牧水と尚義の関

図版および解説

係や、『創作』と『潮音』の関係を語る重要な資料だといえる。創作社友・細野春翠との寄せ書き。1880（大正 13）年 8 月に不忍池に出かけた記録があるが、同行者が違うので定かではない。牧水はよく戯れ歌を作って送っていたという。

（下の段・右から 2 番目）

（様式）絵葉書 伊豆湯ヶ島温泉古瀧風景

（消印）不鮮明 17 日は判読

（宛名）鹿児島市上園町七七 安田尚義様

（差出）伊豆田方郡湯ヶ島温泉湯本館三月十■日

（翻刻）

身体わるく、旅行は二月ほど延ばして
五月初めに出かけます、
いたむ頭を直さんため、
二週間もこゝでじっくり
寝込んで見やうと昨日やつて来ました、
天城の麓の深い溪間です、
延期のこと、お許し下さい、
それに細君も四月の末に
赤んぼなどうむらしいのです、
かれこれの事と思召し下さい

「四月の末に出産」とあるので、1921（大正 10）年の書簡と推定できる。当初は 3 月に西日本への旅を計画していたが、4 月末に出産予定の妻のためにそれを遅らせることにした。その代わりに、3 月 16 日から伊豆湯ヶ島温泉に休養を兼ねて出かけている。冒頭の「二月ほど延ばす」がそれにあたる。

（下の段・右から 3 番目）

（様式）絵葉書 沼津名所 我入道ヨリ富士ヲ望ム

（消印）不鮮明 書面から大正 10 年 4 月 28 日

（宛名）鹿児島市 上之園町八七 七七の添え書きあり（自筆かは不明）

（差出）廿七日 沼津在上香貫 牧水

（翻刻）

をりくのお便り難有う、
小生御無沙汰相済みません、
来月十日当地発、
岡山小豆島高松から神戸大阪京都と跡戻って
鳥取島根下の関と廻り九州に入ります、
御地着はかれこれ六月中旬になりませうか、

図版および解説

日向をあと廻しにしました、
いよく出かくれば先々からおたよりします、
昨夜男子出生、富士人をつけました、

「昨夜男子出生、富士人をつけました」とあるので、1921（大正 10）年 4 月 28 日の書簡と推定できる。1921（大正 10）年、牧水は岡山の中国民報社主催の短歌会に呼ばれたので、そのついでに京阪地方中国地方を旅行し、九州にも渡って帰郷する計画を立てた。書面によれば、鹿児島にも出かける予定だった。

実際の旅程は、岡山での歌会の後、高松、大阪（歌会）、宝塚、神戸、三宮、京都、と巡ったところで、連日の酒宴で体調を崩し、ここで旅を打ち切って沼津に戻っている。このため、鳥取島根はもとより、鹿児島そして帰郷も叶わなかった。

（下の段・右から 4 番目）

（様式）絵葉書 （筑波山）筑波絶頂観測所

（消印）大正 8 年 6 月 29 日

（宛名）鹿児島市上之園町 安田尚義様

（差出）廿九日 筑波山上にて

（翻刻）

まかげさし国見をすれば

白雲は四方に立ち立ち

出島なる潮來は見えず

恋しき■かも 牧

常陸はよき国に

御座候

男体女体の間の茶屋

涼しい風が吹いてます 春

創作社友・綿引梧吾と細野春翠の寄せ書き。1919（大正 8）年 6 月 26 日から、牧水は春翠に誘われて茨城県へ出かける。香取神宮等を参拝し、潮来に遊ぶ。28 日、水海道町の綿引梧吾を訪ねて一泊。書簡の出された翌 29 日には、梧吾・春翠と筑波山に登り、山腹の筑波町に一泊している。

（下の段・右から 5 番目）

（様式）絵葉書 浜辺に遠方の島

（消印）不鮮明 29 日を判読

（宛名）鹿児島市上之園町七七 安田尚義様

（差出）廿九日 沼津町在上香貫 若山牧水

（翻刻 改行）

図版および解説

御無沙汰。皆さんお達者ですか。

この夏は、どちらへか出かけです、(※もしくは どちらへお出かけです、)

こちらには来ませんか。

歌をこの六、七日までに送って下さい、

今後一頁分つつ自選して送って下さい、

沢山出来た時は一頁分、

七月号から一大決心で沼津で印刷発行することにしました、

少しはよくなるでせう。

奥さんによろしくおっしゃって下さい。

「(創作) 七月号から沼津で印刷する」とあるので、1922 (大正 11) 年の書簡と思われる。

七月号発行は 6 月に行われるので、書簡は 5 月以前に書かれたと思われる。

石井十次と安田尚義

尚義の母・アグリが石井十次の妻・品子の姪にあたることもあり、尚義は幼い頃から十次に目をかけられていました。早稲田大学の学生時代には、郷里で夏季休暇を終え上京するにあたり、当時岡山山陽女学校の生徒だった十次の長女・友子（その後、画家・児島虎次郎の妻となる）と次女・震子を岡山まで同道するのが常であったことから、十次家族と尚義の付き合いがかなり親密であったことが分かります。尚義は1913（大正2）年に健康を害して函館から高鍋に帰り、半年ほど静養しており、同時期に十次の臨終に立ち合いました。十次が永眠した直後に、岡山で友子が男児を出産した電報が届いたと、後に尚義は記しています。十次が没してから20年経った1934（昭和9）年1月30日、茶臼原の墓地前で20年祭がおこなわれました。尚義が病にかかり参列できなかったため、鹿児島で歌七首をつくりました。そのうちの一首「糧尽きて…」の歌は、1958（昭和33）年に、十次の孫にあたる児嶋城一郎により歌碑として同墓地入口に建てられました。



43 石井十次から安田尚義に宛てた手紙 安田家蔵



44 石井十次が贈った時計 安田家蔵



45 写真「安田尚義歌碑」(西都市/茶臼原) 安田尚義

安田李仲の庭空間

宮崎県児湯郡高鍋町は、1587（天正 15）年から廃藩置県が実施される 1871（明治 4）年まで、秋月家が藩主をつとめた町です。現在も、高鍋藩の武家屋敷が複数存在しています。たとえば、文化文政時代（1804－1829 年）に建てられたという黒水家住宅は高鍋町が有形文化財に指定し、一般公開しています。高鍋町教育委員会が 1988（昭和 63）年に発行した『高鍋町の武家屋敷と民家<高鍋の文化財第七集>』では、安田家住宅は黒水家の次に古いとしています。南九州大学緑地環境情報学研究室准教授の岡島直方は「高鍋藩八代絵師 安田李仲の住宅と庭の現況とそこにいたる過程からみた人と庭空間の関係」と題した論文を 2010（平成 22）年に発表しました。ここではその内容について紹介いたします。

この論文は南九州大学図書館のホームページに掲載されています。

<https://www.nankyudai.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2022/04/40A027-038.pdf>

46 高鍋藩御用絵師 安田李仲の住宅と庭の現状とそこにいたる過程からみた人と庭空間の関係（パネル 13 点） 岡島直方

安田郁子が伝える戦争の悲劇

1925（大正 14）年に生まれた安田郁子は、戦後、安田家の次男にあたる安田捨男と結婚し、二人の子どもをもうけました。1996（平成 8）年、捨男が事故で急逝します。その後一時期は、子どもと共に神奈川県横浜市で生活をしましたが、子どもの独立後は宮崎に戻り特攻兵の慰霊に努め、語り部として全国を飛び回りました。1983（昭和 58）年には宮崎特攻基地に有志らと念願の特攻兵の鎮魂碑を建て、毎年 4 月には慰霊祭を行い、欠かさずに出席しています。70 歳のときに戦争体験記『モスグリーンの青春』を上梓し、この本に感動した歴史漫画家の磯米が『漫画版モスグリーンの青春』を上梓しました。600 坪の安田邸に一人で暮らし、短歌を嗜みながら穏やかな生活を送っています。

戦時下に 数多き死を受け止めて 泣かぬ女と我はなりたり（安田郁子）

本展では『漫画版モスグリーンの青春』の原稿(もんぺの女学生 p.6～8, 初恋 p.12～18, 学徒たち p.81～84, 白きマフラー p.91～94)を展示しました。

47 漫画版「モスグリーンの青春」原稿（23 点） 磯米（安田郁子原作）



- 48 「宮崎この人 安田郁子」抜粋（10分） 制作：宮崎この人企画
49 みやぎきの肖像「多彩な歌人 安田尚義」（14分） 制作：宮崎ケーブルテレビ

主要参考文献

- 安田尚義 『高鍋藩史話』 1968 高鍋町長 神代勝忠
高鍋町史編さん委員会 『高鍋町史』 1987 高鍋町
徳永孝一 「宮崎県地方史研究紀要 第一四輯抜刷 安田尚義の研究—東京・函館・鹿児島時代を中心に—」 1987 宮崎県立図書館
社会教育課 『高鍋町の文化財 第八集 高鍋の先賢』 1988 高鍋町教育委員会
『一日向の国300年の彩り—郷土の絵師と日本画家展』 2003 宮崎県立美術館
『高鍋学のすすめ』 2014 特定非営利活動法人高鍋町観光協会
長尾直茂 『漢詩』 2020 旺文社

- 凡例 ・著者・編者名、「」内に論文等の名称、『』内に書籍等の名称、
発行年、発行所の順で記した。
・編者等と発行所が同じものは発行所のみを記した。

人物略歴

安田 義成（初代安田李仲）

やすだよしなり やすだりちゅう

生年未詳。幼名を利左衛門と言う。二代秋月種春、三代秋月種信の二公に仕え、絵師狩野尚信に師事し、師より「狩野李仲」と改めるよう名を賜った。以来代々画号を「李仲」と名のようになった。「自画像」の作が安田家に保存され（現在は宮崎県立美術館へ寄託）、79歳の時、手鏡に姿を映して描いた作と伝える。1696（元禄9）年12月5日没。

安田 義正（二代安田李仙）

やすだよしまさ やすだりせん

生年未詳。幼名を利左衛門と言う。別名に正信。狩野養朴常信に師事し、三代秋月種信、四代秋月種政の二公に仕えた。残念ながら作品は残っていない。1706（宝永3）年12月13日没。

安田 義行（三代・雅号不明）

やすだよしゆき

生年未詳。幼名を利左衛門と言う。別名に信行。後に義貴とも名のつた。狩野如川周信に師事する。四代秋月種政、五代秋月種弘、六代秋月種美の三公に仕えた。1747（延享4）年没。

安田 甫行（四代安田利忠）

やすだほこう やすだりちゅう

1712（正徳2）年に生まれる。幼名を利平次という。別名に利忠。修竹齋と号した。狩野随川甫信に師事する。五代秋月種弘、六代秋月種美、七代秋月種茂に仕える。1771（明和8）年没。

安田 義方（五代安田李仲）

やすだよしかた やすだりちゅう

生年未詳。幼名を利平次。後に義門。李仲、好竹齋と号した。狩野常川幸信及び狩野閑川昆信に師事する。七代秋月種茂、八代秋月種徳、九代秋月種任に仕えた。1770（明和7）年、19歳の時一度江戸に出ているが翌年帰郷。家督を継いだ後、江戸に出て1773（安永2）年に狩野閑川昆信について絵を学んでいる。翌年帰郷し、1777（安永6）年5月に「為見習肥前長崎へ指越」とあり、翌6月には帰郷している。同年福嶋院（高鍋藩の飛び地、現串間市）内の画図を著している。1781（安永10）年5月、織部長英等と共に琴弾の松の碑を建てた。1781（天明元）年及び1788（天明8）年に秋月種徳の部屋の壁、襖などの絵を描いている。1793（寛政5）年には比木神社（木城町）の拝殿、天井等を描いている（現在比木神社に残る天井画は八代目の安田守世が描いたものである。）義方は参勤交代のお供として江戸と高鍋を少なくとも17回行き来しているが、その際に共目付、小納戸役などをつとめており、

人物略歴

絵師としてだけでなく藩士としての働きをうかがうことができる。1815 年（文化 12）年 12 月 16 日没。

安田 義為（六代安田李仙）

やすだよしため やすだりせん

1782（天明 2）年に生まれる。幼名を利平次と言う。後に利左衛門とも言う。九代秋月種任に仕えた。1798（寛政 10）年に絵を学ぶために江戸へ出ている。翌年、狩野友川寛信（狩野融川寛信）に入門し、1803（享和 3）年に帰郷。その後、定御目付役、牛馬方、細工方、御雑用御金納戸などをつとめ、江戸御金方役として何度か江戸に出ている。作品は残されていない。1832（天保 3）年没。

安田 守義（七代安田李仙）

やすだもりよし やすだりせん

生年未詳。幼名を兵吉と言う。李仙、閑鶴齋と号した。義為の娘婿にあたる。九代秋月種任に仕える。狩野探信守道に師事した。1841（天保 12 年）年 1 月 26 日没。

安田 守世（八代安田李仲）

やすだもりよ やすだりちゅう

1830（天保元）年 5 月 27 日、守義の長男として生まれる。幼名を利平次と言う。李仲、閑春齋、龍川と号した。九代秋月種任、十代秋月種殷、十一代秋月種樹に仕えた。絵師・狩野探龍守玉について修行した。画業のほか長沼流砲術の免許、西洋砲術の免許を得た。1860（万延元）年 8 月西洋砲術頭取に任命され、その後郷兵教示方、砲術副師の職を歴任した。明治になって藩内分郷絵図取調、宮崎県勧業課地図認め、日向国地図調整、高鍋学校幹事、上江小学校学務委員などの職に就き、実績を残した。1908（明治 41）年 5 月 19 日没。享年 79 歳。墓碑の石は秋月種樹からいただき、墓碑の文字も同公の書である。現在の比木神社天井の双竜の絵は守世が 1887（明治 20）年に描いたものである。

安田 信義（九代）

やすだのぶよし

1855（安政 2）年に守世の一人息子として生まれる。幼名は松之助。明倫堂兵賦局の軍人志望学生で英語を学んでいたが、体が弱く両親が手放さなかったこともあって、廃藩とともに惜しいかな帰農している。1931（昭和 6）年没。

安田 尚義（十代）

やすだなおよし

1884（明治 17）年に生まれる。東京郁文館中学校を経て、1907（明治 40）年早稲田大学卒業。函館商業、鹿児島一中の教師となり地理歴史を担当、一中では野球部長となり全国

人物略歴

中学校選抜野球大会にも出場する。1922（大正 11）年 6 月、太田水穂の主宰する潮音社に加入、短歌を歌誌『潮音』に発表、1927（昭和 2）年には鹿児島市において歌誌『山茶花』を創刊、これを主宰する一方、1929（昭和 4）年には『潮音』の選者となる。戦時中の 1940（昭和 15）年 7 月から鹿児島史蹟主事となる。終戦の年 6 月、高鍋へ帰住。以後高鍋町農地委員（地主代表）、熊本放送局九州ラジオ歌壇選者、高鍋町選挙管理委員会委員長、宮崎地方裁判所司法委員、宮崎家庭裁判所参与並びに調停委員、日向日日新聞短歌欄選者となる。1948（昭和 23）年 10 月『高鍋藩史話』が発行される。1950（昭和 25）年 11 月から宮崎県文化財調査委員（後に文化財専門委員）を務める。1952（昭和 27）年日向文庫刊行（日向興業銀行記念事業）に当たり、編集委員となり『上杉鷹山』を執筆、1953（昭和 28）年宮崎県文化賞を受ける。その後も執筆活動を势力的に継続する。1968（昭和 43）年 1 月 1 日高鍋町名誉町民の称号を贈られた。1974（昭和 49）年没。

安田 郁子（十一代の妻）

やすだいくこ

1925（大正 14）年生まれる。県立宮崎高等女学校を卒業。工学院を経て、群馬県の中島飛行機小泉製作所（当時）で戦闘機の設計に携わる。後に宮崎の赤江海軍施設部/赤江海軍航空隊くれ海軍施設部に勤め掩体壕の設計や製作を行い、多くの特攻兵を見送る。戦時下では、自身も命の危機に何度もさらされた。戦後、安田尚義の次男にあたる安田捨男と結婚。2022（令和 4）年 12 月 16 日没。

トークイベント

6. 25 (土) 14:00～15:00

トークイベント

会 場：高鍋町美術館多目的ホール

登壇者：安田 進氏（現当主のご子息）

安田家の末裔で自身も高鍋史友会に所属する安田進氏が、安田家の歴史についてこれまで調べてきて判明したことや見解などと、実祖父にあたる安田尚義との交流のなかで言い伝えられてきたことなどについて披露した。



トークイベント終了後に安田郁子氏から来場者への挨拶があった。



トークイベント内容

はじめに

安田李仲展は、初代 安田義成から八代 安田守世までのまとまった作品が、一堂に会する数少ない機会です。最初は、宮崎県総合博物館で、安田家に現存するものの中から17点を貸し出して行われました。その後、平成8年10月17日～11月10日まで、高鍋町歴史総合資料館で展示されました。

今回、町美術館では、藩御用絵師安田李仲代々の作品と歌人・郷土史家である安田尚義、「モスグリーンの青春」の筆者である安田郁子を取り上げていただきました。

ローカル色の強い展示ですが、郷土のことを知ってもらえる素晴らしい企画で、この企画をしていただいたことに感謝しています。

1. 狩野派と御用絵師

狩野派といえば、狩野永徳が有名ですが、江戸時代に入ると、狩野派は永徳の孫の探幽の代になって、徳川家の御用絵師となり、二条城の襖絵を描いたりして、狩野派は幕府のお抱えとして日本の画壇を一手に独占します。そして各地の大名も狩野派の画家を藩の御用絵師として雇います。

奥絵師と表絵師

奥絵師の家は4家あり、永徳の子 孝信の長男・狩野探幽が開いた鍛冶橋狩野家、次男・狩野尚信の開いた木挽町狩野家、三男・狩野安信の子孫の中橋狩野家、狩野尚信の子、狩野常信の次男・岑信が開いた浜町狩野家の4つで、いずれも屋敷があった地名をとってつけられています。この奥絵師は最も格式の高い絵師で代々世襲です。江戸城の御用部屋に毎月詰めなければなりませんでした。

奥絵師四家

- ・鍛冶橋狩野（探幽）
- ・木挽町狩野（尚信）
- ・中橋狩野（安信）
- ・浜町狩野（岑信）

	名	号	俗名	没年	継主	邸	作品
初代	義成	李仲	利左衛門	元禄9年	種信公	狩野尚信	（奥絵師） 自画像
二代	義止	李仲	利左衛門	宝永3年	種信公	狩野尚信	
三代	義行	李仲	利左衛門	延享4年	種信公	狩野尚信	（奥絵師） 久松義行
四代	義行	李仲	利左衛門	天明8年	種信公	狩野尚信	（奥絵師） 自画像
五代	義方	李仲	利左衛門	文化12年	種信公	狩野尚信	
六代	義為	李仲	利左衛門	天保9年	種信公	狩野尚信	
七代	義重	李仲	利左衛門	天保12年	種信公	狩野尚信	（奥絵師） 自画像
八代	守世	李仲	利左衛門	明治11年	種信公	狩野尚信	（奥絵師） 自画像

トークイベント

安田家も代々木挽町狩野や浜町狩野の弟子となって江戸で修行しています。

他に表絵師というのが、15 家あります。これは奥絵師の分家や弟子が開いた絵師の家です。格式としては、奥絵師が旗本格なのに対し、表絵師は御家人格で、江戸城に詰めることもありません。安田家八代の安田守世は、なぜか表絵師の愛宕山下狩野家の狩野探龍という表絵師の弟子になっています。なぜ、奥絵師でなく、格下の表絵師に弟子入りしたのか分かりません。

御用絵師

藩の御用絵師で世襲で幕末まで続いたところは聞いたことがありません。幕府の御用絵師と違い、藩の御用絵師は世襲で続いたところは少なく、江戸後期になるほど南画系など諸派の画家が一代限りで雇われていることが多いのです。

なぜ世襲が難しかったかという、画家はそれなりの技量を持たねば御用絵師を勤められないからです。

幕末の八代安田守世は 15 歳で江戸にいき、20 歳まで 5 年間修行しています。それ以外の各代の絵師が、いつどのくらい江戸で修行したかは、記録がないのでわかりませんが、若い時に江戸に出て狩野家の画塾で修行したものと思えます。ちなみに初代安田義成の次男に安田義有というのがあり、分家して絵師として 15 石を貰っていましたが、こちらのほうの家は、「高鍋藩史話」によれば、子孫の代で画業未熟につき、家禄を減らされています。

絵師として下手だと禄高を減らされたりすることがあるので、世襲とはいえ、代々技術を伝えていくのは大変なことだったと思います。

また、御用絵師の仕事として地図を作成するという仕事がありました。高鍋町歴史総合資料館には、分家の初代である安田義有、俗名を与五助と言いますが、世五助の作った大きな高鍋藩の地図が展示されています。このような地図を作る仕事も御用絵師の仕事でした。伊能忠敬が日本全図を作った時も、日向国を測量したのですが、その時は高鍋藩の飛び地の福岡まで、安田父子が親子でついて行って測量に加わったと聞いています。*（伊能測量隊の記録に高鍋藩の測量をした時、絵師安田氏が加わったことが出てきます。測量した期日まで書かれているので、おそらく七代の安田守義が加わったものと思われます。）*さらに、御用絵師は武士でもあるので、小納戸役や目付役などを勤め、役人としても活躍しており、武術も示現流の剣術免許を持つものもいました。

2. 安田李仲（安田系図から）

文久 2 年に安田守世が作成した「安田系図」が残されており、八代守世がそれまでに残されていた記録をまとめたものですが、五代安田義方（義門）の経歴がやたら詳しくたりするなど濃淡があるので、五代目までに書かれていたものを、書き加えて作り直したものかもしれません。*（詳しくは、宮崎総合博物館が発行している昭和 53 年度「研究紀要」No.4 の「秋月藩絵師李仲について（その 1）杉山昭」にほぼ全文が掲載されています。）*

トークイベント

簡略に記すと

初代義成———二代義正———三代義行（後に義貴）———四代甫行———五代義方（後に義門）———六代義為———七代守義———八代守世

以下、各代ごとに経歴と作品を見ていきたいと思います。

初代 安田 義成

号を李仲、名を利左衛門といい、狩野探幽の弟、狩野尚信の弟子で、秋月種春公、種信公に仕えました。師の狩野尚信から、「狩野李仲」の号（絵師としての名前、ペンネームのようなもの）をもらいました。1696年（元禄九年）に亡くなっています。高鍋藩では、上方・下方騒動があり、520人ほどと言われる大勢の侍が死亡や退出したので、二代目藩主・秋月種春の時に、主として儒学者や医者・能楽師など文化人を採用して、激減した藩士の補充をしました。

安田義成も、この上方・下方騒動の後、藩士の補充にて文化人を採用した中で、高鍋藩に来たものと考えられます。自画像は79歳の頃に描いたと言われています。禄高は37石5升で、中小姓格でした。

給人	60石～300石	18人
小給（もと大小姓）	30石～60石	39人
中小姓	15石～50石	128人
かち徒士	10石～35石	187人
足輕	3石～8石	徒士以上の4倍

（高鍋史友会会長 岩切氏の調査による）

安田義成の出身地は高鍋藩に出仕する前は、どうも遠江、それも今の浜名湖の北の三ヶ日町あたりではないかと考えています。その一番目の理由は、「安田系図」には、もともと姓は源氏系図にあるが、安田義成が狩野尚信の弟子になり、「狩野」の姓を名乗ることを許され、狩野家は藤原姓なので、藤原姓に改めたと言っています。もともと安田という姓は、甲斐源氏のひとつで、甲斐にいた甲斐源氏の安田義定が、源頼朝に仕え、鎌倉時代になって、遠江の守護になったことに始まるのではないかと思います。安田家は代々「義」を名前にもつものが多く、安田義定の「義」の名前を継承したのではないかと思います。安田義定の子も駿河守護になっているので、今でも静岡県には安田姓があります。安田義定の分家のまた分家あたりの流れを組むのかと思います。

二番目の理由は、都城の願蔵寺に初代安田義成の涅槃図がありますが、それはもともとは静岡県三ヶ日町の耕隠禅寺に伝わったものだからです。この涅槃図は、涅槃図で評判を取った初代安田義成の傑作ですが、縦160センチ、横121センチもある、今展示されている称専寺の四代安田甫行の涅槃図より、さらに大きな大作です。これには裏書があり、1690年（元禄四年）に、遠州（静岡県）敷智郡庄内村の耕隠禅寺が、遠く日向国の絵師安田義成に依頼し、翌年届いたと書かれています。その後、明治になり、都城島津家の筆頭家老であった龍岡篤敬が耕隠禅寺から譲り受け、都城の願蔵寺に寄贈したものです。このことが軸の裏書に書かれています。これをみるとわざわざ遠く日向の絵師に依頼したことは、初代義成と遠江のつながりを感じるように思います。

トークイベント

安田義成には、新たな発見があり、その人物像が少しわかってきました。

「黄檗大全集」という本があり、黄檗宗に関する人物を網羅している本ですが、そこに安田義成が秋月公の絵師として載っているのです。出典は「鉄牛和尚言録」という元禄年間に出版された本です。黄檗宗は江戸初期に中国から新しく伝わった禅宗の一派で、隠元和尚が伝え、当時は新しい思想・科学として注目され、大大名の中には黄檗宗の寺を建てるものもありました。鉄牛和尚は、名を鉄牛道機（寛永 5/1628 年～元禄 13/1700 年）といい、隠元や木庵とともにわが国に新しい禅宗の黄檗宗を広めた名僧で、各地の大名から招かれて多くの寺を開き、千葉県椿海の干拓を行ったことでも知られていますが、この名僧の言行録が、「鉄牛和尚言録」です。

ここに、初代安田義成は鉄牛道機に参禅して、「元超」という名をもらい、常に枇杷を弾じては、世の無常を嘆き、仏像を彫っては、貧しい者でもこれを与えるが、意に沿わねば、貴人といえどもこれを与えずとあります。どうりで、硬骨な性格が自画像（p.8 参照）ににじみ出て、絵師というより古武士のような風格があります。初代義成の作品は、願蔵寺の涅槃図と自画像以外に見つかっていませんが、鉄牛和尚の寺などでまだあるかもしれません。

30 年ほど前に、安田家で箱の裏に「家老所有」と書かれた古い箱が見つかり、その中に多量の仏画の下絵ばかりが入っていました。その中には「元超」の名が書かれたものがあり、この箱に入っていたものは、初代義成が描いたものが含まれることが分かり、「黄檗大全集」の記載は正しいことが証明されました。

祖父の安田尚義は自分の血の中には、放浪の絵師の血が流れており、これが自分の人格を形づくる三つの内のひとつであると本にも書いています。御用絵師で 47 石ももらっていて、何で放浪の絵師の血が流れていると言うのかと思っていました。祖父は安田義成の出自を知りませんでしたが、この初代義成を放浪の絵師と思っていたようです。そこで根拠にない推測ですが、義成は遠江あたりで活動する仏絵師だったのではないかと。それが狩野尚信の工房に参加していたのではないだろうか。江戸初期には、まだ画塾が整わず、障壁画を描くときは一門だけでなく、職人として他の絵師も参加させていたのではないかと。そういう縁で狩野尚信の弟子となり、御用絵師として高鍋藩に招かれたのではないかと。仏絵師から本格的な絵師になる例は、長谷川等伯に見られます。長谷川等伯は能登で活動する仏絵師でしたが、それが寺が取り持つ縁で京都に出てきて、千利休の知遇を得て、さらに豊臣秀吉に紹介され、国宝の智積院の障壁画も描くようになります。江戸初期までは、そういう絵師の流れもあったのではないかと。長谷川等伯の出自が能登の仏絵師だったことを考えれば、初代義成も高鍋藩に仕えるまでは、放浪の絵師だったのかもしれない。

初代義成が描いた「仏涅槃尊像」（真宗大谷派願蔵寺蔵）の図版は、宮崎県立美術館が発行している図録「日向の国 300 年の彩り 郷土の絵師と日本画家展」（2003 年）p.46 に掲載されています。

二代 安田 義正

幕府奥絵師狩野常信の弟子ですから画力はあったと思いますが、作品は残っていません。

三代 安田 義行（義貴）

作品は不動明王図のみが残っています。画力はかなり高いレベルで、3人の藩主に使えたので、長生きだったと思いますが、詳しいことは伝わっていません。

三代義行が描いた「不動明王図」（宮崎県立美術館寄託/安田郁子蔵）の図版は、宮崎県立美術館が発行している図録「日向の国 300 年の彩り 郷土の絵師と日本画家展」（2003 年）p.12 に掲載されています。

四代 安田 甫行

浜町狩野の狩野甫信の弟子で、種弘公・種茂公に仕えました。明和 7(1874)年、59 歳のとき、功あり一代小給格を賜りました。

安田家の石高は初代義成のとき、37 石五升で、中小姓格でしたが、慶応元(1865)年の人給帳では、47 石 5 升となっています。四代安田甫行のときに加増になったのではないかと考えられます。安田甫行像は、甫行の子の安田義方（義門）が描いたものですが、後ろに槍が掛けられているのが、描き込まれています。四代甫行のとき、一代限り小給格を許されているので、前の表でお見せしたように、給人と小給は上級武士で、中小姓は中級武士なので、一代限り上級武士として認められたわけです。小給以上になると登城するときに、馬に乗り槍持ちを従えて登城できる格になったので、この甫行像には、そのステイタスである槍を描き込んでいるのです。甫行は江戸から日向に帰る途中、病が重くなり、播州室津（今の兵庫県）で、60 歳で亡くなりました。

甫行の絵は、仏涅槃図が高鍋の称専寺に残されていますが、初代義成に劣らぬ技量をしめしながら、初代義成の涅槃図とは違った個性を示しています。

竹鶴図も安田家に伝わっていますが、江戸初期ではないかと思えるような格調の高さがあり、甫行の技量の高さとともに、役人として宮仕えにも優れていたようです。

四代甫行が描いた「竹鶴図」（宮崎県立美術館寄託/安田郁子蔵）の図版は、宮崎県立美術館が発行している図録「日向の国 300 年の彩り 郷土の絵師と日本画家展」（2003 年）p.48 に掲載されています。

五代 安田 義方（義門）

示現流剣術中位で、和歌も学びましたので、源重之の古歌による高鍋の琴弾松を安永 10 年（1781 年）に讃えるための石碑を肝煎りの一人となって建立しています。

義方（義門）の絵としては、19 歳のときに父・安田甫行を描いた安田甫行像が確かなものとしてあるだけですが、若書きだけあって、運筆はたどたどしいながら、父を慕って一生懸命に描いたようです。義方（義門）は、小納戸役方を勤めました。大納戸役が藩主の武具などを取り扱うのに比べ、小納戸役は藩主の印章・掛軸などを取り扱う秘書のような役職で、参勤交代の時には藩主に付き従って上京します。義方（義門）は秋月種茂公の側にあって側用人のような立場だったようです。種茂公の父・秋月種美公が天明七年に病に倒れたとき、

トークイベント

上杉治憲（鷹山）公と種茂（鶴山）公のもとで看病に努めました。安田義方（義門）はその際、遺品として秋月種美公の刀掛け（p.4 参照）を拝領し、安田家に今も伝えられています。

六代 安田 義為

示現流剣術免許で、秋月種任公に仕え、狩野寛信の弟子です。文化 12（1815）年にお目付役となり、その後、御雑用御金納戸役を勤めて、江戸に 2 回行っていますが、作品は残されていません。

七代 安田 守義

実は、橋口家の次男で、名は兵吉といい、安田義為の娘をもらって養子となりました。鍛冶橋狩野の狩野探信守道の弟子で、種任公に仕え、天保 12（1841）年に亡くなりました。高鍋の称専寺に聖徳太子像が完成品としてのこるだけですが、安田家にはいくつかの下絵が残っています。

「中国美人図」（p.9 参照）「袋戸下絵」「華鳥生写画卷」などの下絵が残っていますが、技量は高く、円山応挙の円山派の画法を取り入れており、写生に力を入れてかなりの努力をしたようです。それで、文政 11（1828）年付で、師の狩野探信守道から、狩野の姓を名乗ることを許すという書状をもらっており、養子によって、家が受け継がれてきたようです。

八代 安田 守世

表絵師の狩野探龍守玉の弟子で、龍川と名のりしました。最後の御用絵師で、秋月種任公、種殷公、種樹公に仕えました。長沼流砲術免許・西洋砲術免許を得ており、藩兵の訓練もしていたので、壮年期の写真を見ると西洋砲術家の雰囲気を持っています。写真は明治 2（1869）年の撮影で、長男の松之助（信義）（当時英学勉強中）と共に写っています（p.13 参照）。また、安田守世の砲術家らしい遺品として、種樹公を護衛するため、京都で購入し携行していた火打ち雷管発火式の短筒も残っています。安田守世は天保 12（1841）年の父の死の時、11 歳でしたが、弘化元（1844）年 3 月、15 歳で江戸に出、嘉永 2（1849）年まで 5 年間、狩野探龍守玉に師事しました。孫の安田尚義（10 代目）が祖父守世から子供の頃に聞いた話では、狩野画塾で先輩にいじめられても決して人前では涙を見せず、便所に入って泣いたことなど負けず嫌いの気性だったそうです。明治末年まで生きて、明治になってから藩の許可なく絵が描けるようになったので、民間の依頼を受けて描いたので、残っている絵は多いです。明治 22 年の勸業博覧会に出品した「折衷和漢古図」（p.9 参照）や木城町比木神社の天井板絵「双龍図」（p.12 参照）や「鶴百態」（p.7 参照）などが代表作です。



トークイベント

秋月種樹公の側にあつて、幕末には活躍したようで、京都での政変が高鍋藩に伝わった内容などを、現在展示中の「元治雑記」(p.13 参照)に記録として残しています。西南戦争では、西郷軍に従軍し、細島砲台を守りましたが、秋月種樹公の意を伝える使者の三好退蔵が船でやってきて、説得されたので、さっさと高鍋に帰ってしまいました。このへんは、上級武士の性で、可愛岳突破まで西郷軍に付き従った私の母方の深見家の兄弟とは考え方も違ったようです。本人が安田系図には、長々と自分の経歴を述べておきながら、西郷軍に参加したことを恥じて、一言も書いていません。

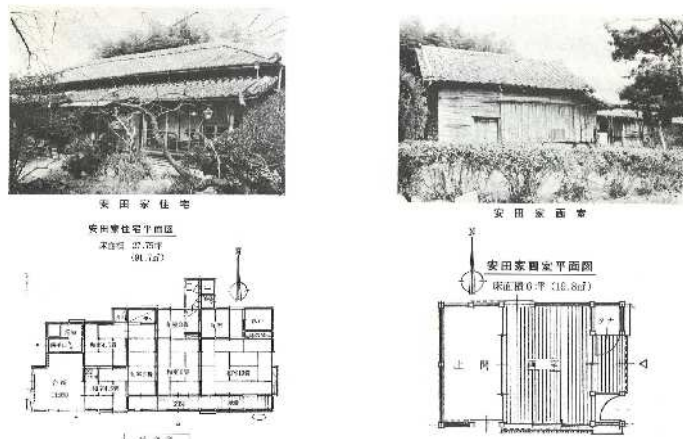
3. 郷土の文化財の継承

藩の御用絵師は、藩のために絵を描くものであり、決して私として絵を描いてはならなかったもので、藩が無くなった明治は別として、江戸時代には自家用として絵を描くこともできなかったのです。安田家には下絵は多く残っていますが、完成品が残されているのは、ごく少なく、例外的に残っているだけなのです。それで、江戸時代の安田李仲の絵が発見されることは、まずないと思います。郷土の文化財は、受け継ぐ人の意識が大切で、マイナーなものでも、郷土にとっては大事なものです。昭和 50 年代には、安田家から「安田義成像」「安田甫行像」などが盗難にあいました。「安田甫行像」はすぐに宮崎市内の骨董店から発見され買い戻しましたが、「安田義成像」(自画像)は、その後、行方不明でした。骨董屋に探させ、10 年ほど経ってやっともたらされた情報をもとに買い戻すことができました。砂丘に落ちた一粒の砂を見つけ出した思いでした。

安田李仲は、初代から八代まで続いた御用絵師としては全国でも珍しい家です。マイナーな地方絵師ではありますが、作品の少なさもあり、郷土にとっては貴重です。さらに、その御用絵師の 200 年前の屋敷が残っており、子孫がそこで暮らしていることを考えれば、全国でも唯一の家であり、それが高鍋にあることは誇ってもいいことだと思います。

『高鍋の武家屋敷と民家』(高鍋町教育委員会)(昭和 63/1988 年刊行)に、武家屋敷としては、9 軒載っていますが、今、どれだけ残っているのでしょうか。高鍋史友会の岩切会長に調べていただきました。9 軒中、2 軒は黒水家住宅(町指定文化財)石井十次生家(県指定史跡)で、文化財としては指定を受けて守られています。残り 7 軒のうち、3 軒が取り壊されてすでに無くなり、1 軒

は現存するものの半壊に近く、安田家住宅を含めて民間で保存されているものは3軒だけだそうです。安田家住宅は残っていますが、馬屋や画室(アトリエ)の「篁竹亭」は老朽化により、取り壊すしかありませんでした。画室(アトリエ)の跡に、茶室を建て「篁竹亭」と名付け



出典：高鍋の武家屋敷と民家（高鍋町教育委員会）（昭和 63/1988 年刊行）

トークイベント

ました。6月19日の安田家公開には、その日だけで90の方が見学に来られました。

(6月中の公開では、合わせて140の方が見学されました。)

一度、取り壊してしまえば、新しいものを建てても、それは古いものではないので、仮に復元したとしても、古建築ではなく、取り壊したものは戻らないのですから、文化財を後世に守り伝えるのは、大事なことです。

なお、『高鍋の武家屋敷と民家』には、全体で24軒が掲載されていますが、うち11軒はすでに取り壊しになっており、さらに2軒は朽ち果てながら現存か、不在状態だそうです。このままでは、高鍋町には町か県指定の古建築しか残らないということに将来なっていくのではないかと危惧されます。

4. 安田 尚義

祖父 安田 尚義

安田尚義は明治17(1884)年生まれで、90歳まで長生きしましたが、東京の郁文館中学を卒業し、明治37(1904)年早稲田大学予科文科に入学、卒業後、函館商業高校や鹿児島第一中学校で教鞭を取りながら若山牧水の「創作」に短歌を投稿したり、太田水穂の潮音社に参加したりして、歌人として活動し、また、郷里に帰ってからは郷土史家として「高鍋藩史話」などを書きました。安田尚義については、いろんな方が優れた研究を残されているので、ここでは私が祖父尚義と交わした話や今回展示している若山牧水の手紙についてお話させていただきます。

夏目漱石邸のネコ

尚義は郁文館中学に入ってから、学校近くの蓬莱館という下宿に住み、尚義の部屋は二階の北側にあったが、その部屋の北隣が偶然に夏目漱石の家でした。部屋から漱石邸の縁側がよく見えたそうです。このころ漱石は「吾輩は猫である」を執筆中で、その猫が毎日縁側に寝そべっているのを見て、時には漱石邸との境の黒塀の上の方の部屋のすぐ真下まで来ていたそうです。私は祖父に漱石はどんな人だったのか尋ねたことがあります。そうしたら、漱石邸の縁側は障子がいつも閉まったままになっており、開いたことがない。だから縁側や庭に漱石が出てきたのを見たことがないと言っていました。さらに聞くと、「漱石は学者のような感じの人だった」とも言っていました。

尚義への手紙

今回の展示にあたり、尚義宛ての手紙を探したら、従来から分かっていた牧水や石井十次の手紙以外にいろんな文化人からの手紙が見つかりました。

柳田 國男 (民俗学者)

川田 順 (歌人)

平泉 澄 (歴史家)

梅原 未治 (考古学者)

トークイベント

古垣 鉄郎 （外交官・NHK会長）

今回、新発見として展示した柳田國男からの葉書以外にこのような文化人からの手紙が見つかりました。川田順は、住友銀行の頭取ながら、歌人として有名で、さらに年齢差の大きい教え子の京大教授の人妻と、かけおち同然に地位も名誉も捨て結婚した老いらくの恋の方も有名ですが、頭取時代からかなり親しく交流していたことが分かり、相当な量の手紙があるので、川田順研究のよい資料になりそうです。他に戦前の歴史家の平泉澄や京都大学の考古学の重鎮の梅原末治、NHK会長だった古垣鉄郎（鹿児島1中時代の教え子）もかなりの量の手紙のやり取りをしていました。意外に手紙が見つからないのが、短歌の師である太田水穂（潮音社）です。また、石川啄木とも函館で、3カ月間、同じ文学サロンで会っていたし、啄木のパトロンで、困窮する啄木のために啄木の妹を妻にした、函館の醸造家の宮崎郁雨とも交流があったので、その関係のものを探しましたが、宮崎郁雨から送られた「啄木ノート」以外は、今のところ見つかりません。

若山牧水の手紙

尚義は著作で、自分が短歌をやるきっかけになった一人は牧水で、牧水は天才だと尊敬していましたが、この手紙を公表したことはありませんでした。祖父は牧水と最初に知り合ったのは、上京するため大阪商船で大阪に行く船待ちをしていた細島の宿だと言っていました。祖父に早稲田で会ったことはないかと聞きましたが、牧水は1学年上だったが、早稲田で会ったことはないと言っていました。すでに明治末年、早稲田大学は写真で見ても二階建ての校舎が何棟も並ぶくらい大きくなっていましたので、これでは会う機会はないだろうと思いました。学外では、著作をみるかぎりでは会っていたようです。牧水が主催する短歌雑誌「創作」は大正5年位から投稿するようになり、葉書や手紙は尚義が牧水の「創作」を去って、太田水穂の「潮音」に移るまでの間に書かれたようで、その間の経緯に関わるものがあります。母が祖父から聞いた話では、祖父は牧水がこんな手紙をよこしたんですよと、見せたそうです。とくにこの葉書は、

カミソノソジンカ ソジャナイカ ヤスダナントカ

ヨシトシテオケ、ソレソレ 牧水 池端湖畔ニテ（p.19 参照）

とありますので、上野池之端の料亭か何かで、酔っぱらって出したもののようです。

「ヤスダナントカ ヨシトシテオケ」とは、何をよしとしておけと言っているのでしょうか。

母が聞いた話では、牧水は短歌雑誌を発行するために、会員から金を集めたが、その金で飲んでしまうので、いつまで経っても短歌雑誌が発行されなかったことがあったようです。

そういう牧水の一面や、歌論の違いも牧水のもとを去る要因のひとつだったと思います。尚義は、牧水の情緒的な歌風よりも、万葉や古今和歌集に立ち返ることを目指す歌風にそこがれがあったようで、そういう歌論の違いも牧水のもとを去り、太田水穂の潮音社に参加した大きな理由だったと思います。この原稿用紙に書かれた手紙（p.19 参照）が最後のやり取りです。

トークイベント

「とにかくあれをば取り消します。気持ちがわるいから取り消します。少し粗忽であったのを許して下さい」とは、何のことなのか。先の池之端から出した葉書に関するもののようにも思えます。

祖父は著書で次のように言っています。

「私は母の厳格な教育とキリスト教の感化で、当時の奔放な文学青年の中に投ずることができなかったが、歌壇に足を踏み入れることになったのは牧水の誘導による処が多い」（「群落」巻末）これが祖父の卒直な気持ちだったと思います。

令和4年12月16日、安田郁子が97歳で永眠しました。皆様には大変お世話になり、おかげで幸せな一生を送ることができたことを感謝いたします。

この報告を、潮音社の木村雅子様（太田水穂の養子、太田青丘先生のご令嬢）にした折、牧水の「創作」と太田水穂の「潮音」の関係を聞きました。木村雅子様の話によれば、太田水穂が最初に「潮音」を始めたのは、大正4年だが、その前に牧水は短歌雑誌「創作」を主宰しており、その後、牧水と妻の若山喜志子（太田水穂の親類）夫妻の体調が悪くなり、「創作」を続けられないということで、太田水穂が短歌雑誌「潮音」をつくり、「創作」を引き継いだそうです。

それで「潮音」の最初の頃には、牧水も参加していたそうで、牧水の体調がよくなった後、牧水はまた「創作」の発行を続けたそうです。私の家には、初期の頃の「創作」と「潮音」が残っていますので、確認して見ました。「創作」の大正7年2月号では、安田尚義も上園素人のペンネームで短歌を寄稿しています。「潮音」の方は、大正14年7月号からしか我が家に残っていないが、大正14年には安田尚義は「潮音」に寄稿しています。手紙のやりとりの時期と「創作」「潮音」への参加の時期は、だいたい合っていますが、さらにそれぞれの雑誌の寄稿を確認していけば、もっと牧水と尚義の関係を追求していけるはずです。

カッパ伝説

最後に堅い話ばかりでなく、やわらかい話で安田家に伝わる伝説を紹介して終わりにします。初代・安田義成が小丸川を馬で渡ろうとしたとき、馬が川の中で進まなくなりました。どうしたことかと後ろをふり返ると、カッパが川の中から手を出して、馬の尻尾をつかんでいます。義成は振り返りざまに、一刀のもとにカッパの手を切り落としました。家に着いて、馬屋に馬を繋ごうとしたら、馬の尻尾にカッパの手がぶら下がってくっついていました。義成はカッパの手を神棚にそなえました。夜になると戸をたたくものがあり、開けるとカッパが来ており、今なら手がくつつくので、手を返してくれと言います。

義成は返さないとすると、カッパは「お前の家の者は十代まで足が不自由になるようにしてやる」と呪いをかけました。果たして、十代目の祖父・尚義は母によると子供の頃に小児マヒがもとで、少し足を引きずるようなところがあったようだと言っていたので、十代目まではカッパのたたりは続きました。私は十二代目なので、もうカッパの呪いは解けています。ここまでなら、どこにでもあったような話ですが、何と戦後までそのカッパの手は安田家にあったのです。祖母も母もその手を見ており、鉄のようになって干からびていたそう

トークイベント

ですが、祖母はその手を水神様の祠に埋めたと言っていました。カッパの手を切った刀も家宝として残されていましたが、さぞ名刀だったのでしょう。戦前にこの刀はたたきがあるの
で、おはらいをしてくると持ち出した人があり、それきり、その刀は安田家に戻らなかった
そうです。この刀は父も見えており、話は聞きました。父はカッパの手はあったよと言っ
ていました。カッパの手は床の間の床柱の上の方に釘にぶら下がっていたそうで、私も見ていた
のかもしれませんが、あまりに幼い頃で覚えてはいません。なんでこんなカッパの手のミイ
ラなどを伝えていたのでしょうか。

終わりに

今回、これだけの展示ができたことは、熱心な努力によるもので、他ではこれだけの展示
や掘り下げ方はできなかったでしょう。牧水や柳田國男の手紙でも、資料館や研究者に連絡
を取っていただき、色々と調べられたので、私も知らなかった様々なことが分かりました。
理解や熱意からも、この企画を成功させてくれた高鍋町美術館の方々に感謝致します。

3D プリンタによる鑑賞キット

3D プリンタによる鑑賞キット

会場内には、視覚障がい者と共に鑑賞することを目的に、3D プリンタで直径 20 c m 程度のキットを 3 点設置した。作品画像をもとに 3D データ化し、その CG データをもとに厚みの調整などを行った。素材は PLA 樹脂（ポリ乳酸）というトウモロコシやジャガイモに含まれるデンプンなどの植物由来のプラスチック素材で作られたものである。

協力：FabLab 宮崎 β 、FazLab



鶴百態 安田守世（八代李仲）



折衷和漢古図 安田守世（八代李仲）

3Dプリンタによる鑑賞キット



花嫁 安田尚義

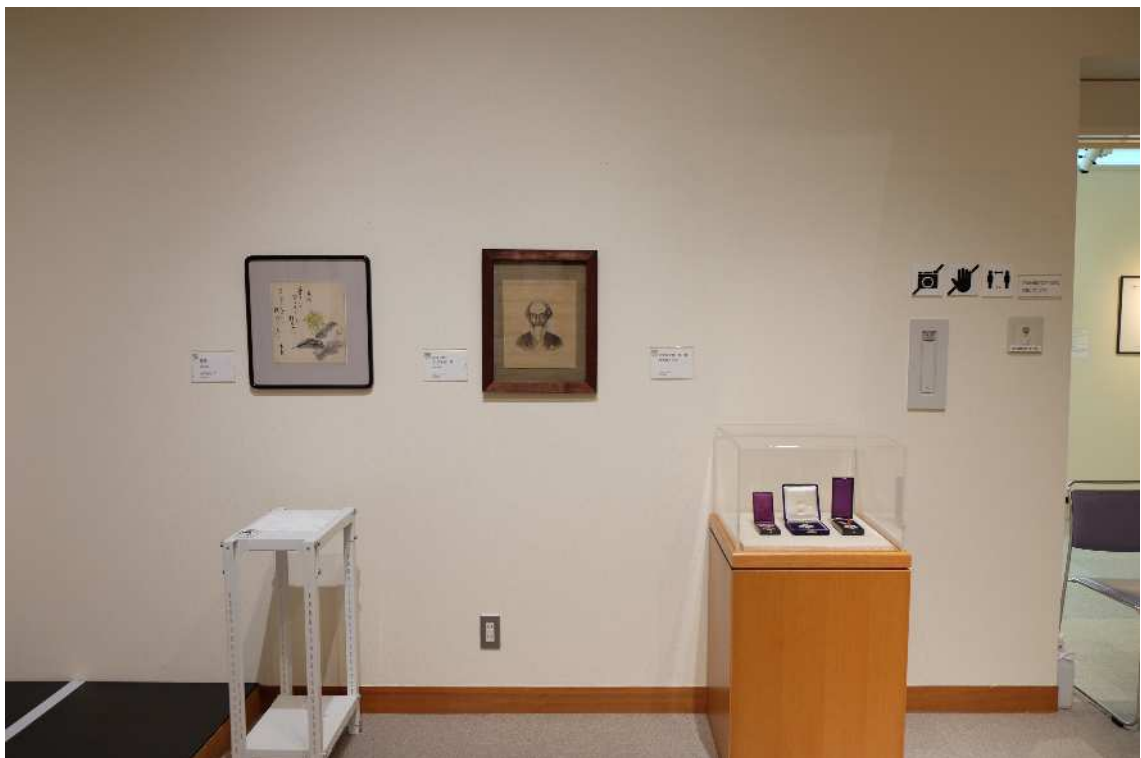




展示風景



展示風景









高鍋藩御用絵師

安田李仲と安田家愛蔵品展

2022.5.28(土) - 6.26(日)

高鍋町美術館
TAKANABE MUSEUM OF ART

主催 | 高鍋町美術館・高鍋町教育委員会・高鍋町
後援 | 宮崎日日新聞社・MRT宮崎放送・UMKテレビ宮崎・エフエム宮崎

No.	名称	技法	作者等	年代	所蔵
高鍋藩と安田家					
1	刀掛け		六代藩主・秋月種美所用	1734-1760	安田家
2	写真「琴弾の松の碑」(高鍋町/蚊口浦)		源重之	?-1815	
3	寄松和歌	紙本墨書・軸	七代藩主・秋月種茂(鶴山)	1743-1819	高鍋町歴史総合資料館
4	明月来相照	紙本墨書・軸	七代藩主・秋月種茂(鶴山)	1743-1819	安田家
5	涅槃之像	紙本淡彩・軸	安田甫行(四代利忠)	1712-1771	浄土真宗本願寺派称専寺
6	聖徳太子像	紙本淡彩・額	安田守義(七代李仙)	?-1841	浄土真宗本願寺派称専寺
7	篁竹亭	紙本墨書・額	八代藩主・秋月種徳	1788-1807	安田家
8	鶴白態	紙本淡彩・軸	安田守世(八代李仲)	1830-1908	安田家
9	七福神図	紙本淡彩・額	安田守世(八代李仲)	1830-1908	安田家
10	筆入れ箱・箔箱・絵皿・金箔		代々安田家絵師		安田家
11	自画像	紙本淡彩・軸	安田義成(初代李仲)	?-1696	安田郁子(宮崎県立美術館寄託)
12	白鷺の図	紙本淡彩・軸	安田義門(五代李仲)	?-1815	安田郁子(宮崎県立美術館寄託)
13	中国美人図	紙本淡彩・軸	安田守義(七代李仙)	?-1841	安田郁子(宮崎県立美術館寄託)
14	中国美人図	紙本淡彩・軸	安田守義(七代李仙)	?-1841	安田郁子(宮崎県立美術館寄託)
15	折衷和漢古図	絹本淡彩・軸	安田守世(八代李仲)	1830-1908	安田郁子(宮崎県立美術館寄託)
16	壽老人	絹本淡彩・軸	安田守世(八代李仲)	1830-1908	安田郁子(宮崎県立美術館寄託)
17	七福神図	紙本淡彩・軸	安田守世(八代李仲)	1830-1908	安田郁子(宮崎県立美術館寄託)
18	高鍋城瓦				安田家
19	ひな人形	紙本淡彩・軸	狩野守玉(探能)		安田家
20	ふよう	紙本淡彩・軸	安田守世(八代李仲)	1830-1908	安田家
21	写真「双竜の図」(木城町/比木神社)		安田守世(八代李仲)	1830-1908	比木神社
22	湿式ガラス板/写真 安田守世(八代李仲)と安田信義			1830-1931	安田家
23	雑書		安田守世(八代李仲)	1830-1908	安田家
24	安田家系図		安田守世(八代李仲)	1830-1908	安田家
25	寄書		狩野守玉(探能)ほか		安田家

作品リスト

No.	名称		作者等	年代	所蔵
26	初日七福神	紙本淡彩・軸	安田守世(八代李仲)	1830-1908	高鷲町歴史総合資料館
27	豊煩大耳	紙本墨書・軸	安田守世/秋月種樹	1830-1908/1833-1904	安田家
28	菊	紙本墨書・軸	太田水穂	1896-1955	安田家
29	あたの山	紙本墨書・軸	安田尚義	1884-1974	安田家
30	古処山に	紙本墨書・軸	安田尚義	1884-1974	安田家
31	尾鈴山	紙本墨書・軸	安田尚義	1884-1974	安田家
32	山茶花	紙本墨書・軸	安田尚義	1884-1974	安田家
33	明日	紙本墨書・軸	安田尚義	1884-1974	安田家
34	花嫁	紙本墨画淡彩・額	安田尚義	1884-1974	安田家
35	安田守世(八代李仲)像		安田尚義	1884-1974	安田家
36	名誉町民章・旭日章・瑞宝章メダル			1884-1974	安田家
37	潮音 第11巻			1925	安田家
38	山茶花 第5巻			1932	安田家
若山牧水と安田尚義					
39	柿原政一郎が安田尚義に宛てた書簡			1883-1962	安田家
40	集合写真(柿原政一郎と安田尚義)			1906	安田家
41	柳田國男が安田尚義に宛てた書簡			1875-1962	安田家
42	若山牧水が安田尚義に宛てた書簡(原稿1点・絵葉書5点)			1885-1928	安田家
石井十次と安田尚義					
43	石井十次から安田尚義に宛てた手紙			1902	安田家
44	石井十次が贈った時計			1902	安田家
45	写真「安田尚義歌碑」(西都市/茶臼原)		安田尚義	1958	
安田李仲の庭空間					
46	高鷲藩御用絵師 安田李仲の住宅と庭の現状とそこにいたる過程からみた人と庭空間の関係(パネル13点)		岡島直方	2010	
安田郁子が伝える戦争の悲劇					
47	漫画版「モスグリーン」の青春(23点)		磯米(安田郁子原作)	2018	
映像コーナー					
48	「宮崎この人 安田郁子」抜粋(10分)		宮崎この人企画	2013	
49	みやざきの肖像「多彩な歌人 安田尚義」(14分)		宮崎ケーブルテレビ	2007	

高鍋藩御用絵師 安田李仲と安田家愛蔵品展

会 期 令和4年5月28日（土）～6月26日（日）

開館時間 午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休 館 日 毎週月曜日（祝日は除く）祝日の翌日（土日は除く）

観覧料

大人 300 円（240 円）

小中高生・高齢者・障がい者 150 円（120 円）

※（ ）内は20名以上の団体料金またはJAF会員証をご提示の方。高齢者は70歳以上。障がい者は障がい者手帳所持者とその介護者1名まで。未就学児と高鍋町内の小中高生および特別支援学校生は無料。

会 場 高鍋町美術館

主 催 高鍋町美術館・高鍋町教育委員会・高鍋町

後 援 宮崎日日新聞社・MR T宮崎放送・UMKテレビ宮崎・エフエム宮崎

作品数 93 点

職員（令和4年度）

館 長 萱嶋 稔

副館長 内田 美香

総務学芸係

係 長 中尾 英子

学芸員 青井 美保

事務員 久家 多佳恵

写真提供

高鍋町美術館

令和 5 年 2 月印刷

令和 5 年 2 月発行

発行者 高鍋町美術館

宮崎県児湯郡高鍋町大字南高鍋 6916 番地 1

TEL0983 (23) 8887

印刷者 高鍋町美術館

宮崎県児湯郡高鍋町大字南高鍋 6916 番地 1

TEL0983 (23) 8887

Printed in Japan ©高鍋町美術館 2023 ©2023,Takanabe Museum Of Art
